

石川障害者職業能力開発校実習場等改修工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

野々市町

末 松 廃 寺

2011

石 川 県 教 育 委 員 会

(財) 石川県埋蔵文化財センター

すえ まつ はい じ
末 松 廃 寺

2011

石川県教育委員会
(財) 石川県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は末松廃寺の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川郡野々市町末松2丁目地内である。
- 3 調査原因は石川障害者職業能力開発校実習場等改修工事であり、同事業を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢営繕事務所が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成21(2009)年度から平成22(2010)年度に実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢営繕事務所が負担した。
- 6 現地調査は平成21年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。

期　間　平成21年4月17日～平成21年6月11日
面　積　530m²
担当課　調査部特定事業調査グループ
担当者　端　猛（専門員）、荒川真希子（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は平成22年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書の編集・刊行は平成22年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。執筆と編集は端が行った。
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。

国土交通省北陸地方整備局金沢営繕事務所、石川県商工労働部労働企画課、石川障害者職業能力開発校、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構、野々市町教育委員会、野々市町末松町内会、社会福祉法人石川サニーメイト、平川　南
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標VII系に準拠した。
 - (2) 水平水準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。
 - (4) 遺物実測図については、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとした。

目 次

第1章 経 過.....	1
第1節 調査の経過.....	1
第2節 発掘作業の経過.....	1
第3節 整理等作業の経過.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査の方法と成果.....	6
第1節 調査の方法.....	6
第2節 層序.....	6
第3節 遺構と遺物.....	6
第4節 総括.....	10

挿図目次

第1図 発掘調査対象範囲と対応区分 (S=1/800)	2	第6図 調査区平面図 (S=1/250)	8
第2図 調査された末松遺跡群と試掘調査によつて確認された遺跡範囲 (S=1/5,000)	3	第7図 調査区壁土層断面図その1 (S=1/60)	9
第3図 末松廃寺の位置.....	4	第8図 調査区壁土層断面図その2 (S=1/60)	10
第4図 末松廃寺と周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)	5	第9図 南区SD01平面・断面図 (S=1/60)	10
第5図 グリッド配置図 (S=1/1,000)	7	第10図 出土遺物 (S=1/3)	11

表 目 次

第1表 末松廃寺周辺の遺跡名表.....	5	第2表 出土遺物観察表.....	12
----------------------	---	------------------	----

図版目次

図版1 遺構1	図版4 遺構4
図版2 遺構2	図版5 出土遺物1
図版3 遺構3	図版6 出土遺物2

第1章 経 過

第1節 調査の経過

石川県石川郡野々市町末松に所在する石川障害者職業能力開発校（以下職能校）は、心身障害者の能力に適した職業訓練を行うための施設である。職業能力開発促進法に基づき昭和45（1970）年4月に国が設置し、その運営は県に委託されている。

平成14（2002）年7月、築後30年以上経過した建物の老朽化や訓練機器の大型化、OA化による教室面積の不足といった状況から、所管する県商工労働部労働企画課（以下労働企画課）は将来の増改築に備えた敷地内の埋蔵文化財の分布調査を県教育委員会事務局文化財課（以下文化財課）へ依頼した。敷地は国指定史跡「末松廃寺跡」に隣接することもあり、文化財課では翌8月に重機による試掘調査を行い、敷地全域で埋蔵文化財を確認し、その旨回答した。なお、敷地は当時の遺跡地図で中世の「大館館跡」の範囲内であったが、分布調査の状況から「末松廃寺」に該当すると判断された。

平成19（2007）年度、基本設計の段階で実際に工事を担当する国土交通省北陸地方整備局も交え協議を行った。分布調査の所見では遺構面より上に1m程度の盛土があり、埋蔵文化財に影響を与えるような工事計画を模索したが、建物の構造からは埋蔵文化財の損壊は避けられない見通しであった。平成21（2009）年3月、国土交通省北陸地方整備局金沢営繕事務所（以下金沢営繕）から発掘調査の依頼があり、依頼を受けた石川県教育委員会は平成21年度に財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）に現地調査を委託した。増築部分880m²を対象に発掘調査の対応となったが、施設の運営と併行しての調査であり、騒音や安全面での配慮が特に必要であった。

【文化財保護法に基づく通知・届出等】

文化財保護法第94条第1項土木工事等のための発掘通知〔国土交通省北陸地方整備局金沢営繕事務所長平成21年3月23日付け国北整金営技第75号〕

文化財保護法第92条第1項発掘調査届〔財団法人石川県埋蔵文化財センター理事長平成21年4月14日付け財埋第18号〕

第2節 発掘作業の経過

末松廃寺の現地調査は石川県教育委員会から県埋文センターに委託され、平成21年4月1日付で契約が締結された。調査は県埋文センター調査部特定事業調査グループが担当した。4月17日に現地で金沢営繕、労働企画課、職能校、文化財課、県埋文センターで打合せを行い、調査の工程、排土置場や調査事務所等の作業ヤード、安全管理等について協議をし、地元町会への説明、作業ヤードの確保について労働企画課、職能校側で対応、埋文センターが協力することになった。敷地内で作業ヤードを確保するのは難しい状況であったため、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構の協力を得て隣接する旧石川障害者職業センター敷地を利用することで合意した。

ところで、現地での打合せで調査対象範囲内に雨水や污水の配管及び集水枡等が存在することが確認され、勾配等の関係から仮配管も難しく、それらが機能している状態での調査が前提となった。中には昭和40年代に設置された陶製の管（汚水）もあり、接合部分の脆弱さから養生のための盛土を残

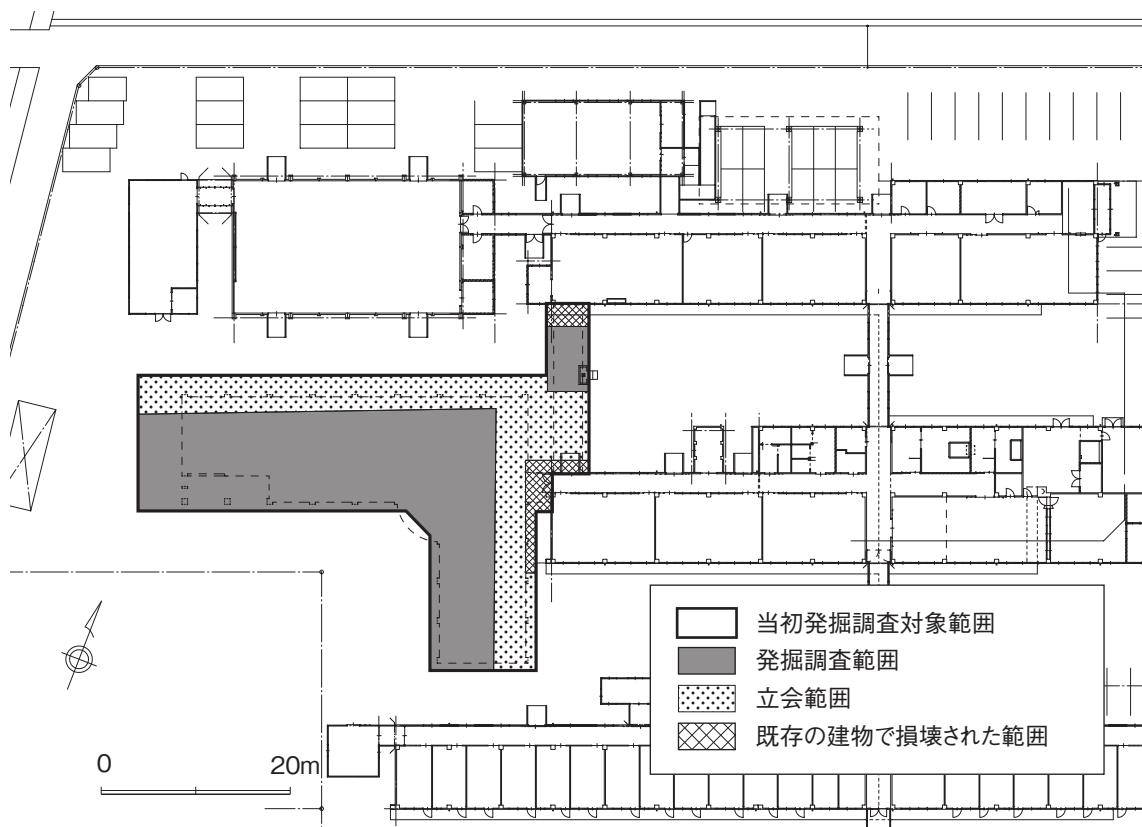
しての掘削とならざるを得なかった。協議の結果、当初対象としていた880m²のうち530m²について発掘調査を実施し、残りの350m²については調査状況により判断することとなった。

作業ヤード借地の目処が立ち調査工程が決まった5月3日に地元町会へ説明を行い、調査事務所を設営し5月18日から表土掘削を開始した。5月20日より作業員による本格的な掘削作業に入り、6月4日に空中写真測量を実施、補足調査の後、調査区の埋め戻しを行い6月11日に現地調査を完了した。調査区は現校舎の中庭にあり、休憩時間や屋外活動の途中で訓練生や学校関係者の質問を度々受けその都度説明した。皆興味深そうに聞いており関心の高さが窺えた。

詳細な調査結果は後述するが、遺構は調査区の西側や南側で確認されたものがほとんどであった。また、調査区で確認された埋設管の設置工事の状況から、その深度に係わらず床掘り等により遺構面が攪乱を受けていることも推定された。さらに、特に重要な遺構が埋設管部分に延びている様相もなかった。以上により対応が未定となっていた350m²については、文化財課が工事立会をすることとなった。平成21年秋から冬にかけて工事の進捗に合わせ複数回行った立会では、遺物は散見されるものの明確な遺構はなく、発掘調査の結果と矛盾はなかった。



立会の様子



第1図 発掘調査対象範囲と対応区分 (S=1/800)

第3節 整理等作業の経過

出土品整理作業は平成21年度に洗浄作業を、平成22年度に記名・分類・接合、実測・トレイス、遺構図トレースの各作業を実施した。作業は県埋文センターに委託され、調査部特定事業調査グループが担当した。

報告書の原稿執筆・刊行作業は平成22年度に県埋文センターに委託され、調査部特定事業調査グループが担当した。



整理作業の様子



第2図 調査された末松遺跡群と試掘調査によって確認された遺跡範囲（本田ほか2000を一部改編、S=1/5,000）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石川郡野々市町は、南北に長い石川県のほぼ中央に位置し、町域は県下最大の河川である手取川によって形成された手取扇状地北東側の扇央部から扇端部を占めている。一見平坦に見える地勢も町の南北端での標高差は約35mを測る。扇形約12km、展開度約120度の規模を有するこの手取扇状地は、古くは網の目状に氾濫する河川が造作した大小無数の小谷により放射状に連なる島状微高地を多く地下に内包することが、最近までの発掘調査成果により確認されている。

北東側を金沢市に、南西側を白山市に接する野々市町は、古来交通の要地、商都として開かれた。近世以降昭和前半期にあっては金沢近郊の長閑な農村風景を呈していたが、近年の相次ぐ土地区画整理事業等の施行と、それに伴う郊外型大規模店舗の進出や人口増加により町域の景観は大きく変貌を遂げている。人口は平成22（2010）年の国勢調査速報値で51,892人（平成23（2011）年2月総務省発表）を数え、平成23年11月頃を目途に「野々市市」誕生に向け準備を進めている。

末松廃寺は、この野々市町の南西端、末松2丁目に所在し、遺跡分布範囲の中央部分は末松廃寺跡として昭和14（1939）年に史跡に指定された。昭和41、42（1966、67）年の史跡整備に向けた本格的な発掘調査を経て現在は史跡公園として整備されており、遠足を含めた課外学習の場として活用されている。発展著しい町にあって周辺は農村住環境活性化事業の施行等により緑豊かな景観を保持している貴重な地区である。国道157号鶴来バイパスや石川県立大学の整備を経た今も町域のオアシスとしてどこか優しい空気を醸し出している。

第2節 歴史的環境

野々市町末松地区は多くの遺跡が密に分布しており、末松廃寺を中心として末松遺跡、末松ダイカン遺跡、末松福正寺遺跡など周辺の遺跡は末松遺跡群と総称されている。発掘調査も多数行われており、その成果から地域史を考える上での基礎的なデータが蓄積されつつある。

北陸では最も古い時代に建立された古代寺院である末松廃寺は7世紀第3四半期創建とされ、当初は東に塔、西に金堂を備える法起寺式の伽藍配置を採用しており、建物の変遷から4画期5時期に整理されている。ただし、創建伽藍がその威容を保っていたのはわずか半世紀ほど、8世紀第1四半期までのことである。また、末松遺跡群では7世紀後半以降8世紀中葉にかけて集落としてのピークを迎える、9世紀半ばまでには衰退へ向かう様子が知られている。この周辺集落の隆盛時期は末松廃寺の創建伽藍の廃絶時期にあたり、廃寺の理解を複雑にする一要因にもなっている。



第3図 末松廃寺の位置



第4図　末松廃寺と周辺の遺跡分布図（S=1/25,000）

番号	県道跡番号	名 称	種 別	時 代	番号	県道跡番号	名 称	種 別	時 代
記	記6	末松廃寺跡	寺院跡・集落跡	弥生・奈良・平安、中世	29	15003	安養寺遺跡	集落跡	平安
1	16013	末松廃寺跡	寺院跡・集落跡	奈良・平安	30	15008	部入道A遺跡	散布地	奈良・平安
2	16019	大館跡	館跡	平安～室町	31	15009	部入道B遺跡	散布地	奈良・平安
3	16017	末松砦跡	城跡	不詳	32	15010	部入道C遺跡	散布地	奈良・平安
4	16018	末松ダイカン遺跡	集落跡	奈良～中世	33	15012	熱野遺跡	集落跡	平安、中世
5	16011	末松福正寺遺跡	散布地	古墳、平安	34	08036	倉光館跡	館跡	鎌倉
5	16016	福正寺跡	散布地	平安、不詳	35	08035	若林長門館跡	館跡	室町、安土・桃山
6	16010	末松B遺跡	散布地	弥生	36	-	乾町三月田遺跡	集落跡	中世
7	16020	古元堂館跡	館跡	不詳	37	08045	乾町遺跡	墓地・集落跡	縄文～近世
8	16014	末松C遺跡	散布地	奈良・平安	38	08046	専福寺遺跡	寺院跡	中世
9	16012	末松古墳	古墳	古墳	39	08047	高田遺跡	散布地	縄文、平安
10	16015	法福寺跡	寺院跡	不詳	40	08037	幸明経塚	経塚	安土・桃山
11	-	末松じりわん遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	40	08038	西方寺跡	寺院跡	安土・桃山
12	16022	清金アガトウ遺跡	集落跡	縄文、弥生、奈良・平安、中世	41	-	中奥・長竹遺跡	集落跡	弥生～中世
13	16021	末松信濃館跡	館跡	中世	42	08044	長竹遺跡	墓地・散布地	縄文～古墳、中世
14	16009	末松遺跡	集落跡	縄文、平安	43	08043	橋爪遺跡	集落跡	縄文、弥生、中世
15	16023	三林館跡	館跡	安土・桃山	44	08041	橋爪ガノアナ遺跡	集落跡	平安
16	-	藤平田ナカシキンギ遺跡	集落跡	中世	45	08042	橋爪松の木遺跡	墓地・散布地	中世
17	-	堀内館跡	館跡	弥生、中世	46	-	福正寺ゴコメマチ遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安、中世
18	-	三納ニショヤ遺跡	集落跡	縄文、弥生、中世	47	-	橋爪B遺跡	集落跡	奈良～中世
19	-	三納アラミヤ遺跡	集落跡	縄文、奈良、平安	48	-	橋爪新A遺跡	集落跡	弥生～平安
20	16008	栗田遺跡	集落跡	縄文、奈良、平安	49	-	橋爪新B遺跡	集落跡	平安
21	16006	下新庄アラチ遺跡	集落跡	奈良	50	08039	幸明遺跡	集落跡	奈良・平安
22	16007	下新庄タナカダ遺跡	集落跡	奈良・平安	51	08034	幸明遺跡	集落跡	古墳、奈良～中世
23	16005	上林古墳	古墳	古墳	52	-	幸明おとまる田遺跡	散布地	奈良
24	16004	上林新庄遺跡	集落跡	縄文、古墳～平安	53	08033	三浦常在光寺跡	寺院跡	鎌倉
25	16003	上林テラダ遺跡	集落跡	奈良	54	08032	三浦高麗野遺跡	墓地	鎌倉
26	16001	上林遺跡	散布地	弥生、平安	55	08031	上二口遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
27	16002	上新庄ニシウラ遺跡	集落跡	古墳、奈良	56	08012	木津遺跡	集落跡	弥生～中世
29	15002	柴木遺跡	集落跡	平安	57	08011	法蓮寺跡	寺跡	不詳

第1表　末松廃寺周辺の遺跡名表

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査では公共座標（世界測地系）に基づく10mグリッドを設定した。グリッドは北西隅を起点として西から東方向へアラビア数字を、北から南方向へアルファベットを10m間隔で振り分け、北西隅の杭をもとに「D 2区」などと呼称した。D 2杭の座標がX = -51.690、Y = 56.370である。また、調査区は大きく2つにわかれしており、東側の小さい調査区を東区、西の大きい調査区はさらに埋設管等により西、北、中、南区と呼称した。遺物の取り上げなどは主にこの調査区名を使い、必要に応じ前述のグリッド名も併記した（第5図）。

第2節 層序

調査区全域で約1mの盛土が確認されており、その下に水田耕作に伴うと考えられる灰色～青灰色の粘質土及び黄灰色の粘質土の堆積が見られる。北区、中区付近はその直下で拳大から人頭大の礫床が広がっており、一部上層の粘質土が礫間に堆積していた（第7図D-E、F-G断面）。礫層が耕地整理等で削平されその後耕作土が入り込んだ様子を窺うことができる。

礫層は西区、南区でも一部検出されるが、西区では暗褐灰色粘質土が、南区では暗褐色シルト層が続いて検出された。さらに、それぞれ黄褐色シルト層の地山へと続くが、西区の壁面観察ではシルト層の下に礫層が確認できた（第7図A-B、B-C断面）。つまり、礫層は調査区中央付近で高く西、南へ向け低くなっている、確認できた範囲では礫層の上にシルト層が堆積する。北区、中区で礫層が削平されている状況が想定されることと合わせ、かつてはこの礫床の上にも黄褐色のシルト層が堆積し小高くなっていた可能性が高い。

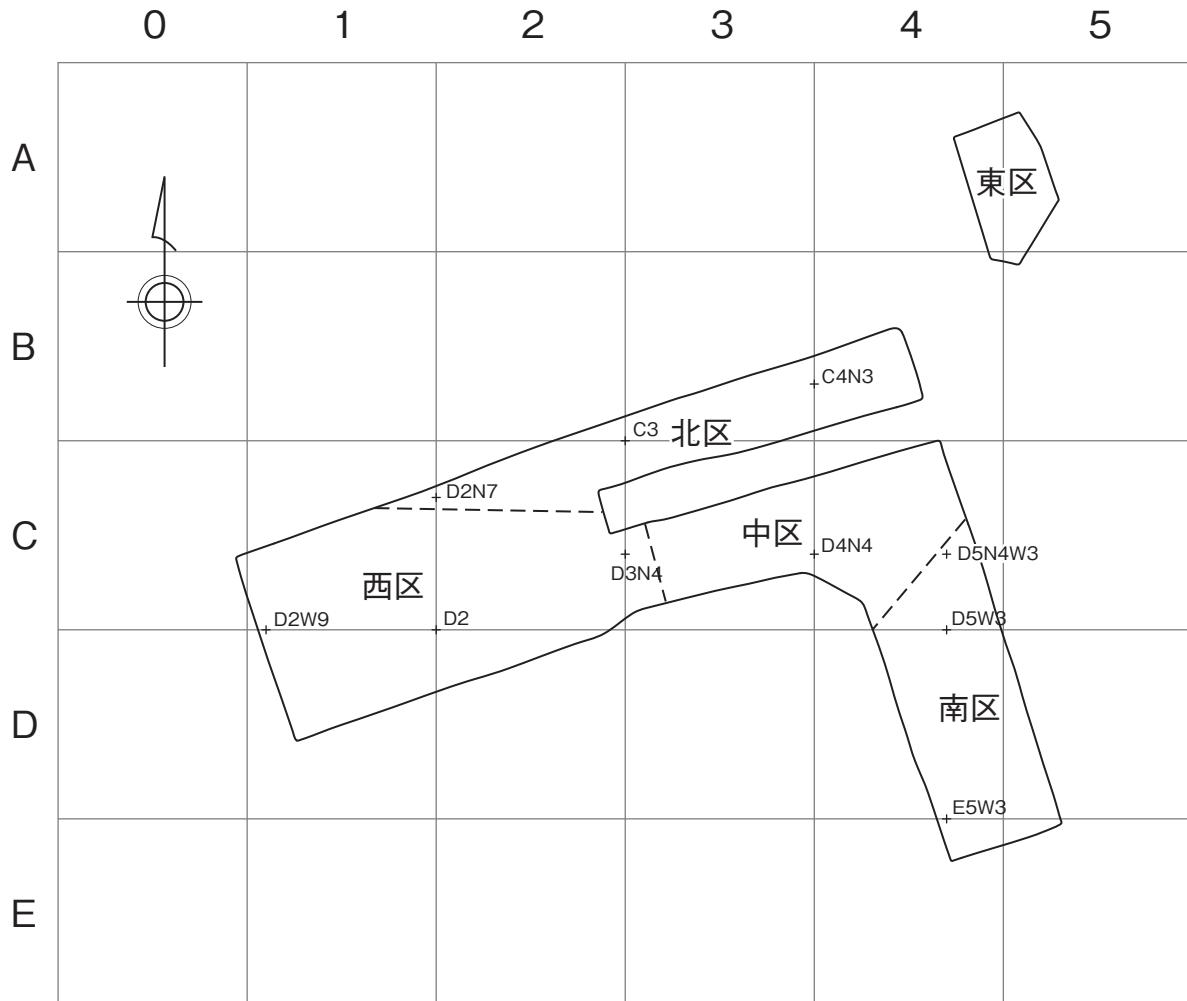
東区では現地表下1.6mまで掘り下げ、さらに部分的に掘り下げてみたが、狭小な調査区と砂による盛土の崩落の危険性からいわゆる地山は確認できなかった（第8図）。分布調査の所見とも合わせ大きな鞍部にあたると考えられる。

第3節 遺構と遺物

調査の結果、遺構は西区と南区でピットや溝を検出したものの中区北区は礫床上でピットをわずかに検出したのみである。出土遺物もコンテナ1箱分で小片のものが多い。

西区では、数個のピットを検出したがいずれも柱穴と言いきれるものはなかった。調査区周辺が耕地整理等により削平されていることを考え合わせれば、検出できなかった位置にもピットが存在した可能性もあり、必ずしも建物はなかったとは言い切れないが、現時点では明確な建物遺構は確認できなかった。遺物は小片ばかりで図化できたものは第10図4、11、24、25である。24、25が遺構検出時に出土しており、旧耕作土に関連する遺物であると考えられる。

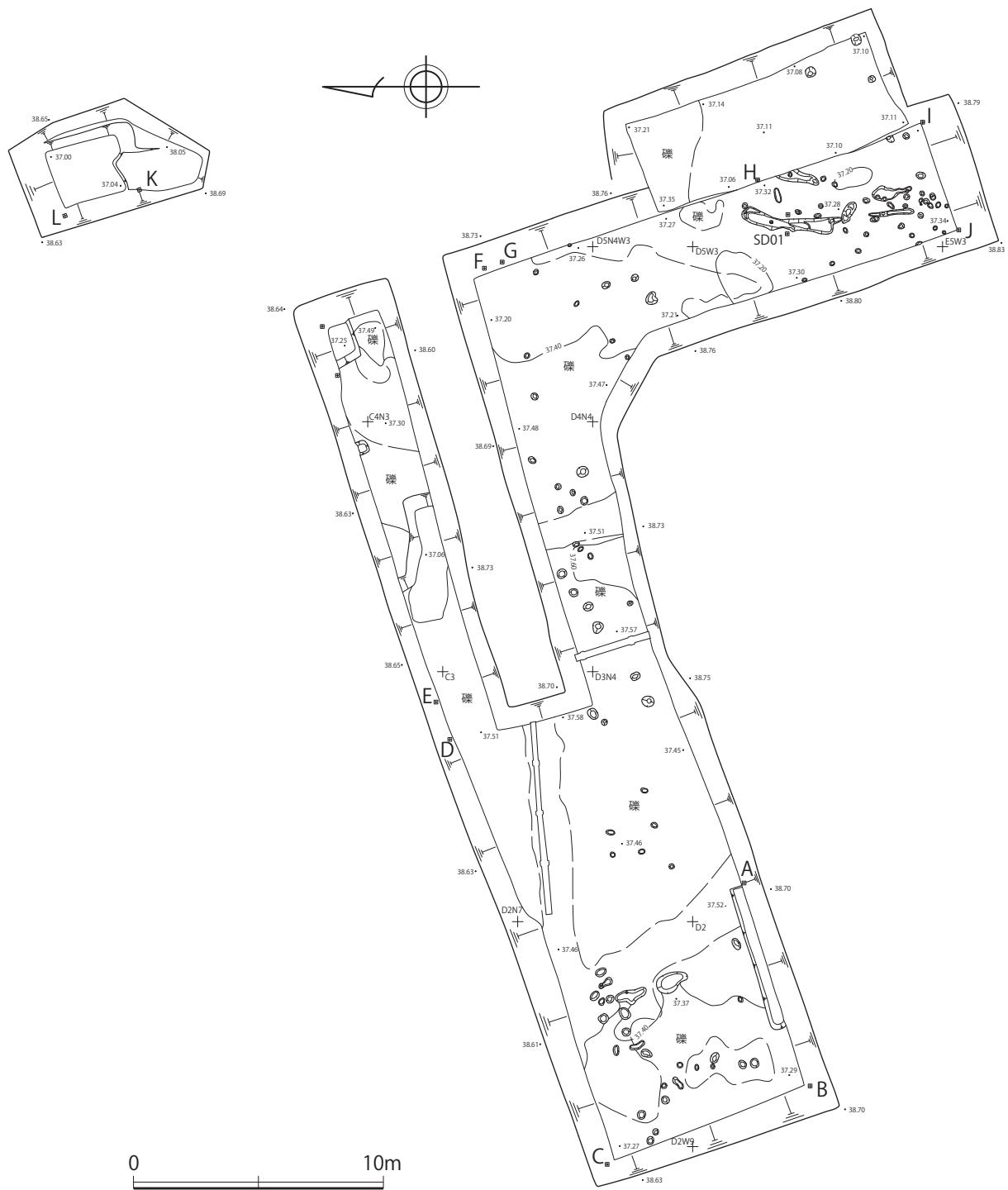
南区では、数十個のピット群と溝を数条確認したが、西区同様明確な建物遺構は確認できなかった。検出したピット群も柱穴の様な掘り方をもつものはなく、覆土も黄褐色シルトの地山よりやや暗いシルト質の土で漸移的に地山へと続きその境も明瞭ではなかった。周辺の遺跡で検出されるいわゆる性

第5図 グリッド配置図 ($S=1/1,000$)

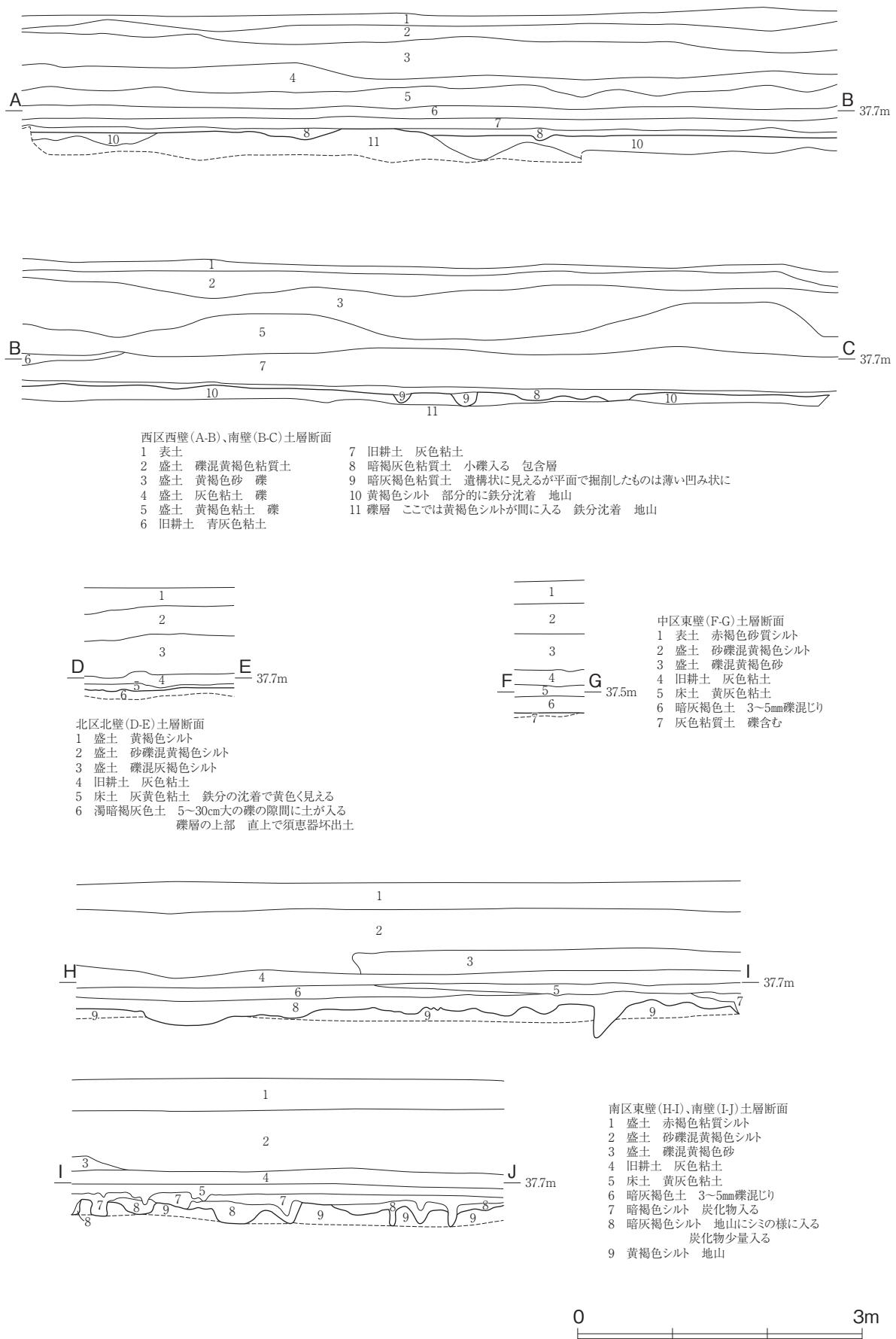
格不明のピット群と酷似している。遺物は、遺構検出時に出土したものが主で第10図13、14、15、19、26を図化した。南区SD01からは第10図5、20が出土している。溝は長さ3.6m幅60cm深さ15cm程度検出したが、ピット群と同様に覆土は黄褐色シルトの地山よりやや暗いシルト質の土で漸移的に地山へと続きその境は明確ではなかった。SD01はほぼ南北方向に沿っており、南にも細い溝が検出されている。また、東に1.5m程間をおいて溝状の遺構が検出されている。周辺の調査でも南北方向の溝が東西に連なって検出されており、畠の畝溝の可能性が指摘されている。さらに、畝溝群の周辺には性格不明のピット群が同時に検出される例が多い。本遺跡のSD01やそれに続く溝については南北方向の溝が東西に連なっているとまでは言い難いが、いわゆる性格不明のピット群と共に検出されていることから畝溝としての可能性を指摘しておきたい。

北区では、礫床の上で数個のピットを検出したが、前述の様に削平されていると考えるのが妥当である。第10図1、2は礫の直上から出土した。2の底部は正位で礫の直上に、1は周辺より出土したが、2の口縁部の破片や1の端部の破片が2の底部直近で出土した。また、その割れ口の状況も合わせて判断すれば、重機での表土掘削時に押し潰した可能性があり、正位で身に蓋を被せた状態であったと想定される。2の底面高台内には墨書があり「秋□〔若カ〕」と判読した。

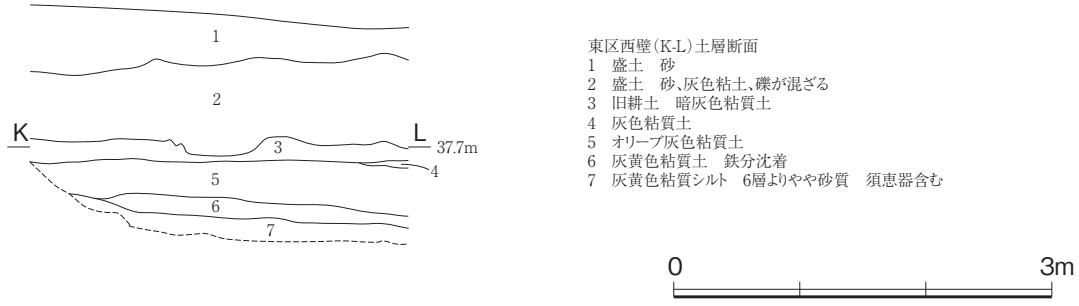
立会時に出土した第10図17の土師器甕は頸部に孔を1箇所確認した。孔の観察から焼成前に穿孔さ



第6図 調査区平面図 (S=1/250)



第7図 調査区壁土層断面図その1 (S=1/60)



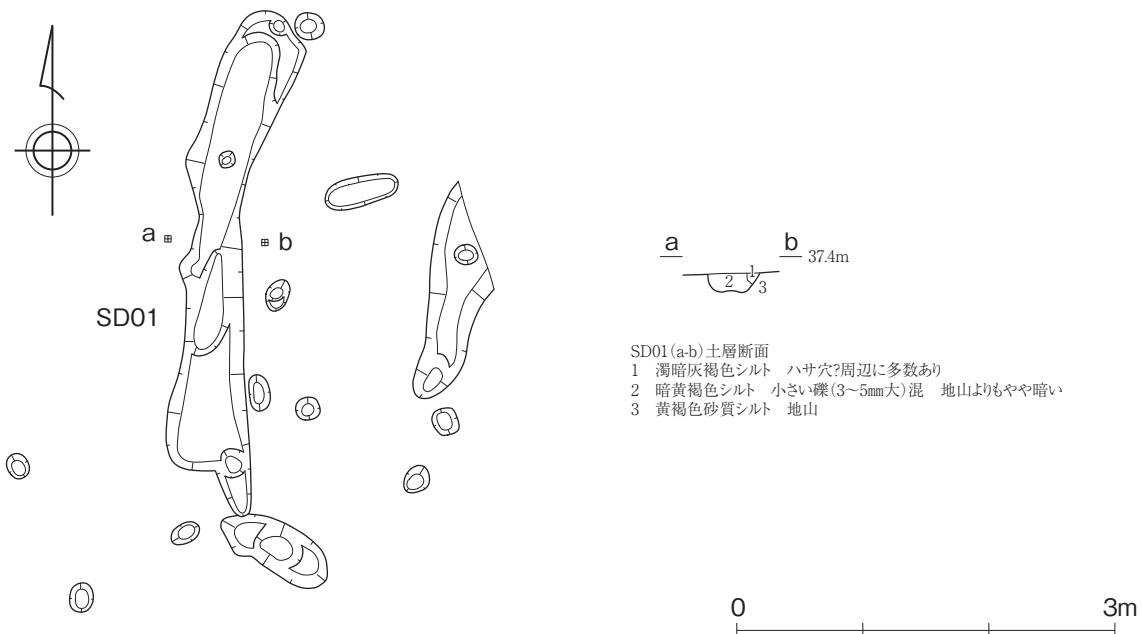
第8図 調査区壁土層断面図その2 (S=1/60)

れており、頸部が全て出土したわけではないが1箇所のみ穿たれていた可能性もある。体部外面は色調より被熱していると考えられ一部剥離も認められる。

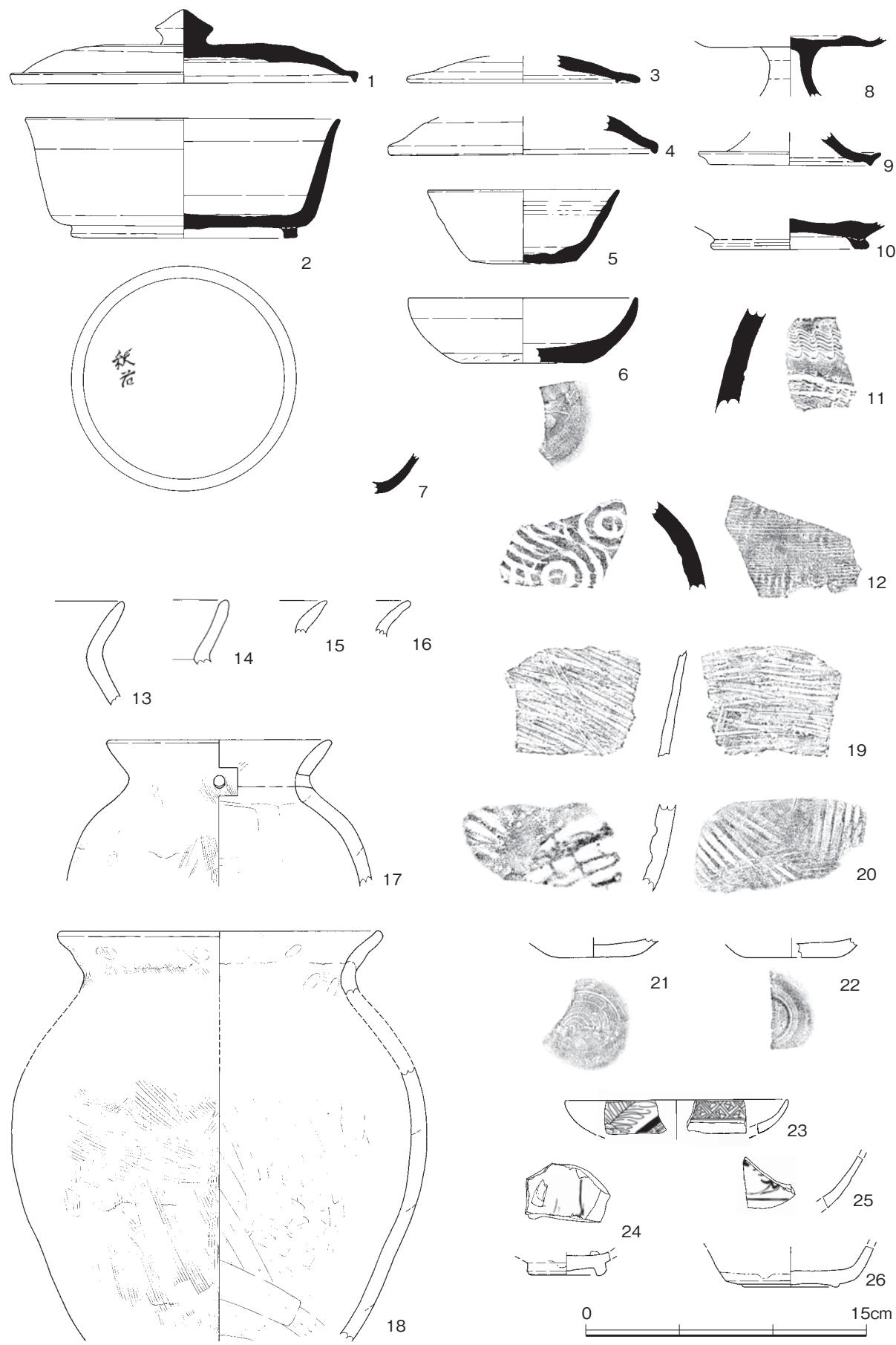
第4節 総括

調査では溝と小穴といった遺構を検出したが、明確な建物遺構は存在せず耕作域を確認したにとどまった。周辺の現況は水田面の高低差が見られるもののほぼ水平と言っていいが、調査区の堆積状況から、かつては今よりもかなり起伏の激しい地形であったことが推測される。周辺の遺跡の調査結果などから従来より指摘されていることでもあるが、島状微高地上に各時代の集落が断続的に連なることが知られている。今回の調査区で、北区や中区がこの島状微高地の高地部分に当たるとすれば集落の中心地であった可能性もある。

北区の礫床上から正位で出土した須恵器（第10図1、2）は遺構の底に設置されていた可能性が高い。遺構の詳細は不明であるが、かつてあった微高地上に何らかの遺構があったことの傍証とも言えよう。



第9図 南区SD01平面・断面図 (S=1/60)



第10図 出土遺物 (S=1/3)

(単位: cm)

報告番号	実測番号	出土地点	種別	器種	口径 最大長	底径 最大幅	器高 最大厚	色調 (内)	色調 (外)	胎土	調整 (内)	調整 (外)	遺存度	備考
1	D2	北区壁面精査、包他	須恵器	蓋	18.4	つまみ 径3.1	39	灰	灰	1mm以下の砂粒 多、黒色粒少	ロクロナ デ、ナデ	ロクロナデ、 ロクロケズリ	口縁2/12、 体部4/12、 つまみ完形	
2	墨1	北区暗灰褐	須恵器	有台坏	16.6	12.0	6.4	灰	灰	細砂多、粗砂少、 海綿骨針含む	ロクロナ デ	ロクロナデ、 ヘラ切り、ケ ズリ、ナデ	口縁3/12、 底部ほぼ完形	秋若カ 墨書
3	D5	東区遺構検出	須恵器	蓋	「6.4」		(1.4)	灰白	灰白	細砂少、粗砂少、 黒色粒含む	ロクロナ デ	ロクロナデ、 ロクロケズリ	2/12	
4	D12	西区遺構検出	須恵器	蓋	「14.0」		(2.0)	灰	灰	細砂少 密	ロクロナ デ	ロクロナデ、 ロクロケズリ	口縁1/12	
5	D13	南区SD01	須恵器	無台坏	「10.1」	5.5	3.9	灰	灰	細砂含む 密	ロクロナ デ	ロクロナデ、 ヘラ切り	3/12	
6	D3	北区遺構検出	須恵器	無台坏	「12.2」	6.8	3.5	灰白	灰白	細砂多、粗砂少、 長石・石英・黒色粒含む	ロクロナ デ	ロクロナデ、 ロクロケズリ	口縁1/12、 体部2/12	
7	D23	東区遺構検出	須恵器	坏			(2.1)	灰	灰	細砂・粗砂少、 黒色粒含む	ロクロナ デ	ロクロナデ、 ハケ	小片	
8	D8	立会P3	須恵器	高坏			(3.2)	灰	灰	細砂・粗砂少、赤色粒含む	ヨコナデ	ロクロナデ		外面一部降灰
9	D6	東区遺構検出	須恵器	高坏(脚部)		9.8	(1.75)	灰	暗灰	細砂・粗砂・礫 ・黒色粒少	ロクロナ デ	ロクロナデ	4/12	内面降灰
10	D4	東区遺構検出	須恵器	有台坏?		8.4	(1.6)	灰白	灰白	細砂多、粗砂少、 黒色粒多	ロクロナ デ	ロクロナデ	底部6/12	底面に黒色物付着
11	D17	西区遺構検出	須恵器	壺				灰	暗灰	1mm以下の砂粒 多く含むが密 雲母僅少	ヨコナデ	ヨコナデ、樹 描文	小片	
12	D14	中区遺構検出(灰粘)	須恵器	甕			4.7	灰	灰	細砂・粗砂多、 礫並、海綿骨針 ・黒色粒含む	タタキ (当具痕)	カキメ、タタ キ	小片	
13	D20	南区遺構検出	土師器	甕口縁	17.8		(5.5)	浅黄	浅黄橙	粗砂多	摩耗の為 不明瞭	ヨコナデ、ハ ケ	小片	
14	D22	南区壁面精査	土師器	甕口縁	「15.7」		(3.5)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の細砂 ・粗砂含む	摩耗の為 不明瞭	ヨコナデ	小片	外面煤がまばらに点在
15	D21	南区壁面精査	土師器	甕口縁	「17.9」		(1.7)	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	粗砂少、赤色粒 僅少	摩耗の為 不明瞭	ヨコナデ	小片	内外面煤付着の痕跡あり
16	D16	東区遺構検出	土師器	甕口縁	「12.7」		(1.9)	にぶい 黄褐	にぶい 褐	細砂・粗砂・赤 色粒少	ヨコナデ	ヨコナデ、ハ ケ	小片	
17	D9	職能校工事立会 表土除去時(包出土か)	土師器	甕	「9.8」		(7.8)	にぶい 黄橙	橙	細砂・粗砂多、 礫少、海綿骨針 ・赤色粒含む	ナデ	ヨコナデ、ハ ケ	口縁3/12	頸部に穿孔1ヶ
18	D10	職能校工事立会 表土除去時(包出土か)	土師器	甕	「17.0」		口縁(3.4) 胴部(14.6)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	細砂・粗砂多、 礫少	ナデ、ケ ズリ、指 押え	ヨコナデ、ハ ケ	口縁2/12	
19	D1	南区遺構検出		体部片			(5.7)	浅黄~ 黄灰	灰黄	粗砂多、礫少	条痕	条痕	小片	
20	D19	南区SD01	土師器	長胴甕 か?				黄橙	黄橙	1mm以下の砂粒 含む、焼土塊多	ハケ→タ タキ	ハケ→タタ キ→カキメ	体部の小片	外面煤付着
21	D15	中区遺構検出	土師器	境底部		3.6	(0.9)	にぶい 橙	にぶい 橙	細砂少、長石・ 石英含む	ロクロナ デ	ロクロナデ、 回転糸切り	6/12	
22	D18	中区遺構検出	土師器	境底部		4.6	(1.0)	橙	にぶい 橙	細砂・粗砂少、 長石・石英含む	ロクロナ デ	ロクロナデ、 回転糸切り	3/12	内外面共摩耗の為調整 不明瞭
23	D24	北区遺構検出	磁器	皿	「11.8」		(1.8)			灰白、緻密			小片	染付
24	D11	西区遺構検出	陶器	皿か?		4.2	(1.3)			黄味を帯びた乳 白色で密、粗砂 僅			高台部7/12	透明釉(淡黄色を呈す) 内底に鉄絵描かれてい る(黒褐色)
25	D25	西区遺構検出	磁器	碗か?						灰白色、粒子少 なく緻密、気泡 少			小片	染付で草花文か(発色 は暗青色)、内外面共 透明釉
26	D7	南区壁面精査	陶器	碗か?		5.0	(2.15)			灰白色で密、細 砂少			6/12	灰釉(灰オーラー色を 呈す)透明感あり 内 外面共貫入あり

第2表 出土遺物観察表

引用・参考文献

- 柿田祐司(ほか) 2005 『野々市町末松遺跡』 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 1989 『末松遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 本田秀生(ほか) 2000 『野々市町末松遺跡群』 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 安中哲徳(ほか) 2009 『野々市町末松遺跡』 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 山田由布子(ほか) 2006 『末松遺跡』 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 横山貴広(ほか) 2009 『史跡 末松廃寺跡』 文化庁
- 横山貴広 2001 『末松A遺跡・末松しりわん遺跡』 野々市町教育委員会
- 野々市町史編纂専門委員会編 2004 『野々市町史』 資料編1 考古 古代・中世 石川県野々市町
- 野々市町史編纂専門委員会編 2005 『野々市町史』 集落編 石川県野々市町
- 野々市町史編纂専門委員会編 2006 『図説 野々市町の歴史』 石川県野々市町
- 野々市町教育委員会 1988 『ののいち町 田地俗称地図』

遺構 1

図版 1



遺跡遠景（南から）



調査区全景（上が北）

図版2

遺構2



西区完掘状況（西から）



南区完掘状況（南から）

遺構 3



着手前（西から）

図版 3



表土除去状況（東から）



作業状況



西区遺構検出状況（西から）



南区遺構検出状況（南から）



遺物出土状況



中区完掘状況（西から）



東区完掘状況（南から）

図版 4



西区南壁土層断面（A－B間、北から）



西区西壁土層断面（B－C間、東から）



北区北壁土層断面（D－E間、南から）



中区東壁土層断面（F－G間、西から）



南区南壁土層断面（I－J間、北から）



南区東壁土層断面（H－I間、西から）



南区SD01土層断面（南から）

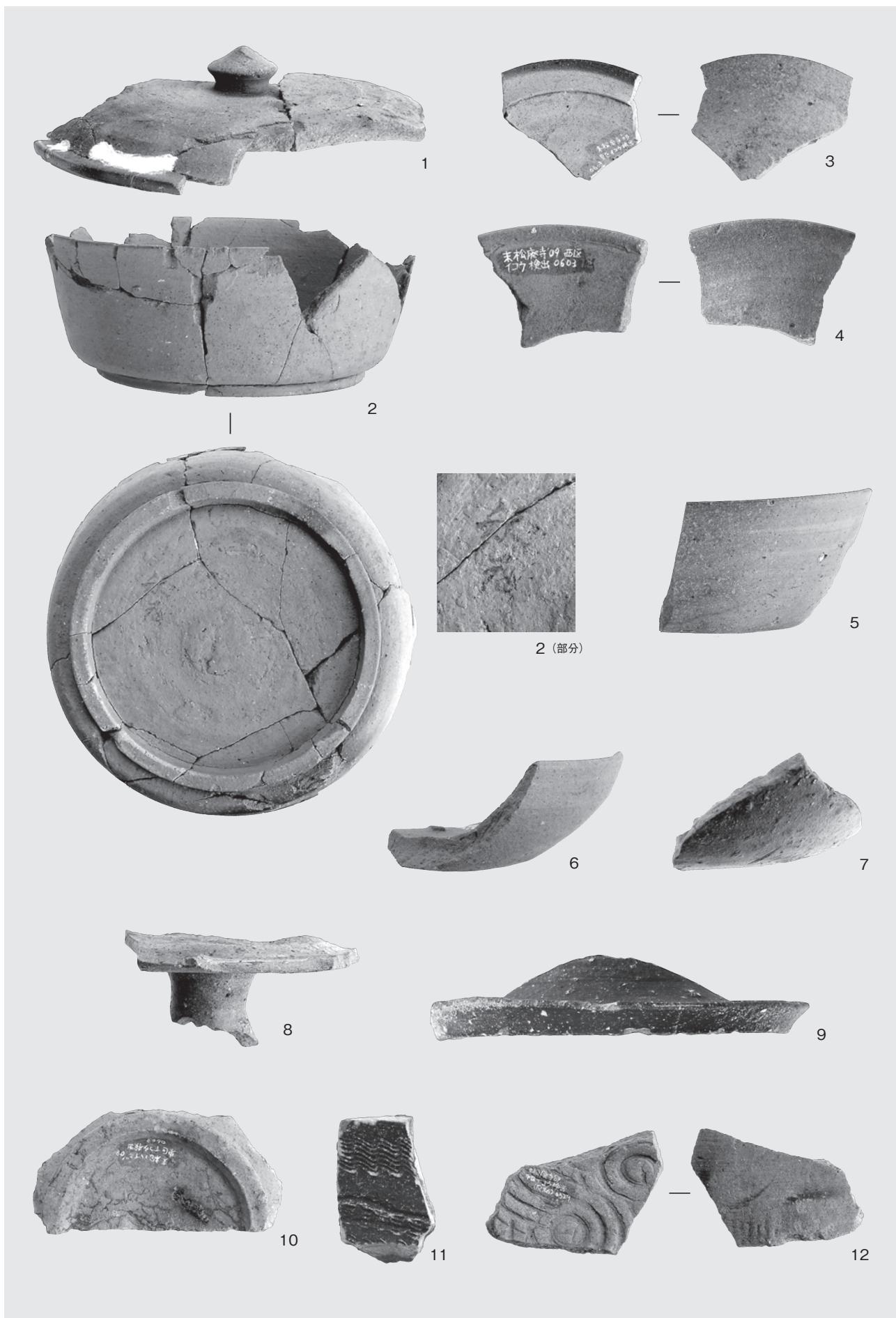


東区西壁土層断面（K－L間、東から）

遺構 4

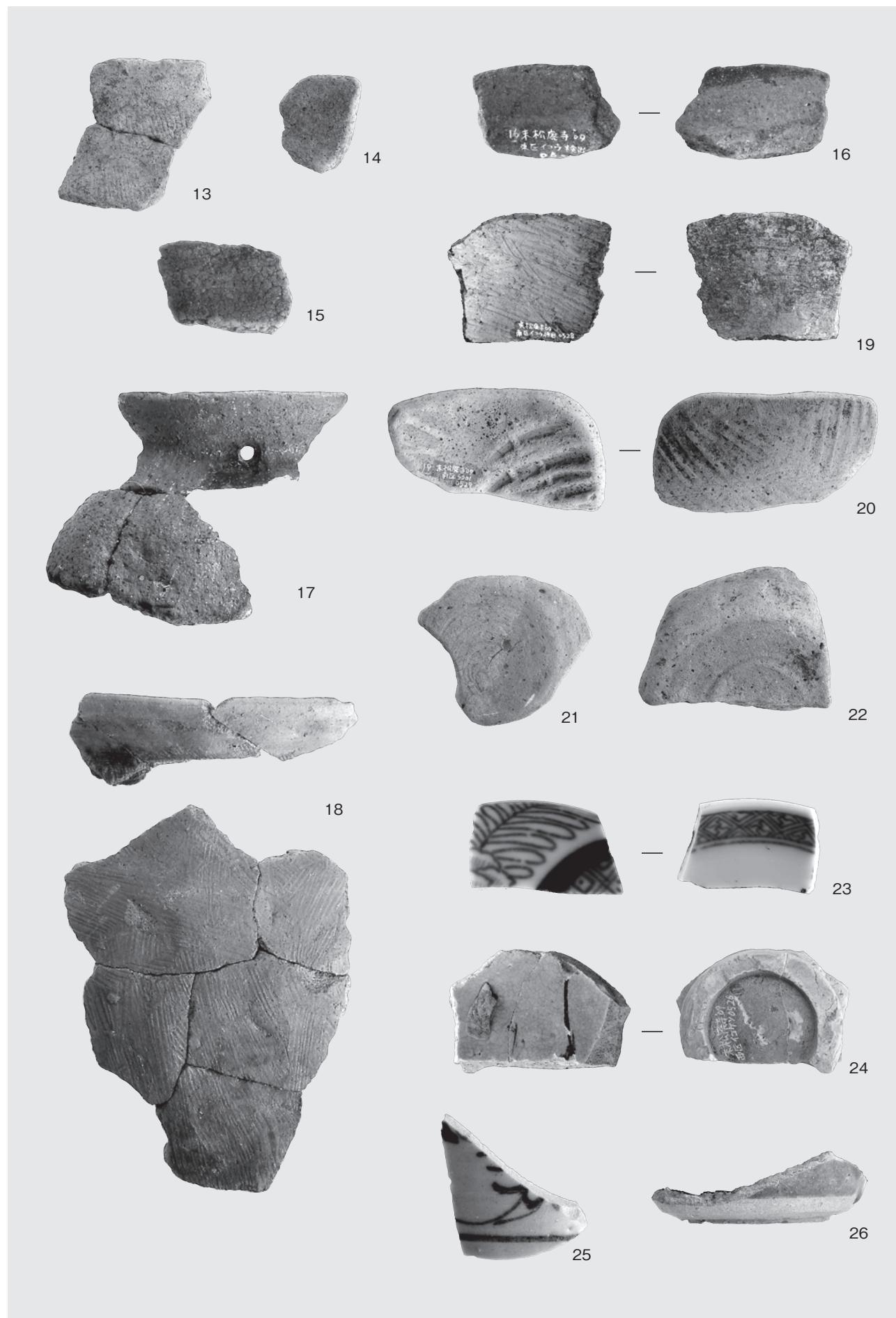
出土遺物 1

図版 5



図版6

出土遺物2



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ののいちまち すえまつはいじ							
書名	野々市町 末松廃寺							
副書名	石川障害者職業能力開発校実習場等改修工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	端 猛							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すえまつはいじ 末松廃寺	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 の の いちまちすえまつ 野々市町末松 ちょうめ ちない 2丁目地内	17344	16013	36° 30' 24"	136° 35' 23"	20090417 ～ 20090611	530m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
末松廃寺	集落	奈良・平安時代	溝、小穴		土師器、須恵器			
要約	奈良・平安時代の集落。明確な遺構も少なく遺物量も少ないが、遺跡の縁辺というよりは後世の削平を受けている可能性が高い。							

野々市町 末松廃寺

発行日 平成23（2011）年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人 石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 能登印刷株式会社